

早稲田大学大学院国際情報通信研究科

博士論文審査報告書

論 文 題 目

The Application of Maurice Ravel and Toru Takemitsu's Techniques of Musical Composition to the Conception and Direction of Experimental Digital Cinema

モーリス・ラヴェルと武満徹の音楽構成技法の
実験デジタルシネマ演出概念への適用

申 請 者

HO WEN-SHING

何 文薰

国際情報通信学専攻
マルチメディア表現研究 II

2013 年 11 月

本論文は、デジタルシネマの演出概念に対し、音楽の構成技法における記譜法、音色体系、形式、構造を適用することで、既存の映画製作の表現領域を押し広げることを目的としている。

音楽を作曲する作業と映像で物語を組み立てる作業は、極めて似ている。しかし、音楽においては、11世紀に生まれた近代的記譜法により、作曲家は羊皮紙上で音楽のアイデアを編集し、演奏時には洗練された感情的な効果を表現することができるようになった。記譜法により、ピッチとメロディー、長調と短調、ポリフォニーと対位法、拍とテンポ、ソナタ形式と交響曲、モチーフとシーケンス、主旋律と変奏曲、そして即興などパターンの関係性を体系として識別、視覚化する能力が大きく向上した。しかし、映画において感情や物語を表現するのに、作曲家にとっての記譜法のような視覚的表示手段はない。この研究では、デジタル編集のアプリケーションレイアウトが、音楽が書きとめられていく記譜作業と似ていることから、記譜法のテクニックをデジタル映像編集に適用し、視覚的に映画的な経験を生み出すことができるのではないかという点に着目した。

一方、モーリス・ラヴェルと武満徹は、楽曲の独創性において西欧と東洋の代表的作曲家として知られる。モーリス・ラヴェルは、フランス印象派の作曲家の中でも最高の一人とされ、アカデミックで多様なモチーフ、異次元のエレメントを重層的に重ねてイメージーションを掻き立てる作風が特徴的である。武満徹は、日本を代表する国際的作曲家で、沈黙の音、つまり時にネガティブスペース(空白部分)とも呼ばれることのある東方の音楽における「間」という概念を真正面から捉えることによって、自らの作曲技法を生み出した。ラヴェルとは反対に、モノトーンモチーフが特徴的である。両者は、この対極とも思える技法や作風の一方、ジャズの応用、即興性、前衛性、映像的であるという面で共通性を持つ。

この二人の音楽構成技法を、現代のデジタルシネマ技術と調和させて、映画演出概念に適用し、映画作品『WATER』(2010, 15分)、『THIEF』(2011, 50分)、『TAKAO DANCER』(2013, 99分)を実践製作、その検証を行うことで、デジタルシネマの表現にとっての可能性を考察することが本論文の趣旨である。

なお、本論文は英語で執筆されている。

以下、各章ごとに概要を述べ、評価を加える。

第1章“Introduction”では、本研究の背景と研究対象を明らかにし、本論文の目的及び構成を示している。これにより、「音楽作曲手法が映画製作技法に適用し得るのではないか」という仮説が立てられた。研究対象に観念的な部分も少なからずあり文脈において曖昧に成りがちであるため、研究のプロセスをモデル化して認知度をより深くしている点が評価される。

第2章“Research Background”では、研究の背景として、音楽と映画、双方を生み出した共通の源としての三つの概念について言及している。

- ① 音楽と映画における時間と空間の概念の共通性。
- ② 時間と空間の概念が、形式の認識にどのような影響をもたらすのか。

③ この研究成果をどのように実践（映画製作）に適用するか。

ここでは、三つの要素をどのように統合するかを主要なテーマとし、記譜法とデジタル編集のアプリケーションレイアウトを比較しながら、先行研究の紹介と本研究の独自性が述べられている。以上から、本研究の研究背景を明確化し、本研究が独創性のある新規な方法論に基づく実証実験であることを示した点が評価できる。

第3章“Methodology and Experiments”では、この研究の方法論とそれに沿って実践された実験的な映画製作について説明されている。

映画における伝統的表現法に関連して、20世紀初頭のフランス印象派の作曲家モーリス・ラヴェルと日本の作曲家武満徹の音楽構造を代表サンプルとし、その作曲技法を映画製作に適用するに至った経緯を述べている。その結果、次章の第4章から第6章にかけて、適用実証実験としての映画『WATER』、『THIEF』、『TAKAO DANCER』の試作に至ったことに言及した。このことは、本研究の位置づけを明確にし、次章以下で述べるそれぞれの作品の製作意図にとっていかに有効であったかを明確にした点で評価できる。

第4章“First Film Experiment WATER”では、ラヴェルの作曲技法を、実験映画『WATER』の演出概念へ適用する方法について述べている。

ここでは、フランス印象派の作曲家モーリス・ラヴェルが彼の作品『オンディーヌ』（水の精の意）で使用したソナタ形式とポリリズムかつポリトータルなモチーフを適用した。『オンディーヌ』では、ルイ・ベルトランの詩が作品の青写真となっており、音楽は物語とみなされている。『WATER』では、脚本が、ラヴェルにとってのベルトランの詩と同じ役割を持ち、青写真としてそこから映画の物語が生まれている。『WATER』では、深く音楽の本質を探求しつつ、“水”というラヴェルと同じインスピレーションの対象物から派生させた新しい現代的な形式を、デジタル技術を応用して映画作品として生み出した点について評価される。

第5章“Second Film Experiment THIEF”では、武満徹の作曲技法を、実験映画『THIEF』の演出概念へ適用する方法について述べている。

作曲家武満徹は、「人生そのものが現実であり虚構である」と述べているが、『THIEF』においては、武満のアジア的な価値観、文化意識、倫理観を反映させながら、彼の特長である単一音源、モノトーンによるイマジネーションの広がりにつながる作曲構造を、映像表現として、「虚構と現実」、「人生とリハーサル」といった演出概念へと適用し、映像化している。また、武満のジャズに触発された即興的一面を、テーマは一つでありながら構造がさまざまに変化する中での周期的な時間のモチーフといった概念として表現しており、作曲概念から映画演出概念への適用が作品自体の芸術性を高めていることは評価に値する。

第6章“Third Film Experiment TAKAO DANCER”では、第4章、第5章における二つの実践を踏まえて、ラヴェルと武満の作曲技法の更なる展開を適用した実験映画『TAKAO DANCER』の実践製作について述べている。

『TAKAO DANCER』では、ラヴェルの『La Valse』から触発された多重層音調を反映したデジタルでの多重合成映像を製作して、混沌、不安、恐れなどを可視化すると同時に、武満の作曲技法を適用して、未来から過去へと時間を輪廻させる思想、一つのテーマから多様な意味を生む作曲構造の映像化表現の実践について述べている。更に、ラヴェルと武満が合わせ持つジャズのインプロヴィゼーションという表現方法を加味したことについて言及している。これらによって、ラヴェル及び武満の作曲概念から映画演出概念への適用が少なからず実践され、作品自体の芸術性を高めていることは評価に値する。

第7章“Conclusion and Proposed Future Research”では、本論文で得られた成果をまとめると共に、今後の課題を述べ、デジタルシネマの演出概念に対し、音楽の構成技法における記譜法、音色体系、形式、構造を適用することで、既存の映画製作の表現領域を広げられる可能性について言及し、今後の研究へと繋げている。

以上要するに、本論文は、著者の一連の芸術実践の根底にある創造基盤とその過程で得られた知見について論じ、実践作品化したものである。ここで論じられた内容は、11世紀より発展してきた近代的記譜法と音楽芸術の要素を、近代デジタル技術に適用して、既存の映画製作の表現領域を押し広げる実践製作の試みである。その結果として本研究で試作された映画『TAKAO DANCER』が2013年度東京国際映画祭に正式招待作品となるなど一定の成果を挙げたことから、有効な手段のひとつであることを実証した。これは、デジタル映画製作表現に新たな可能性を切り開くものとして高く評価する事が出来る。

国際情報通信学において、技術とコンテンツ・サービスは車の両輪としての役割を果たすという観点から、著者の一連の芸術実践活動およびそれをまとめた本論文は、国際情報通信学の発展に寄与するところがきわめて大きい。よって博士（国際情報通信学）の学位を授与するに値するものと認める。

2013年11月20日

審査員：

主任 早稲田大学教授
早稲田大学教授
早稲田大学教授
早稲田大学教授

博士（人間科学）（早稲田大学）

安藤 紘平
坂井 滋和
河合 隆史
JUNKERMAN John